

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2022 年度
氏名	岡安 絢子	指導教員 (主査)	田中 博勝

論文題目	<p style="text-align: center;">自己愛のスタイルによる防衛機制と抑うつおよび攻撃性の関連</p> <p style="text-align: center;">— 「誇大型」と 「過敏型」 に着目して —</p>
------	---

本文概要

【問題意識と目的】 近年の自己愛研究では、自己愛の特徴を誇大型と過敏型の 2 種類に分けていることが多い。Gabbard(1994 舘監訳 1997)は、誇大型の特徴として、「他の人々の反応に気づくことがない」などの特徴が挙げており、過敏型においては、「他の人々の反応に敏感である」といった特徴を挙げている。Gabbard(1994)は、これら 2 種類の自己愛の特徴について、どちらのタイプにあっても自己評価を維持しようとするが、その対処の仕方はかなり異なっていると述べている。Gabbard(1994)が主張するように、自己愛者の抱える問題の本質が同じものであるにもかかわらず、対照的な状態像が生じてくるのには、内部処理が異なるためと考えられる。本研究では、この内部処理を防衛機制と仮定して研究した。防衛機制とは、自分を脅かす出来事や恐れなどの心理状態を不安にさせるものに対して、過度な不安から自分を守るために、実際の知覚を変化させて対処するメカニズムである(吉住・村瀬, 2008)。本研究の目的は、1. 自己愛の誇大型と過敏型傾向(自己愛の程度)と防衛スタイルの水準、抑うつ、攻撃性の関連を明らかにすること、2. 過敏型と誇大型という自己愛の型による、自己愛と防衛スタイルの差を明らかにすること、3. 自己愛の型と防衛スタイルの水準が抑うつ・攻撃性に与える影響について明らかにすることの 3 点である。

【方法】 20 歳～29 歳までの大学生・大学院生・社会人に対して、無記名式の質問紙を作成し、インターネット上でリサーチ会社(Questant)に依頼し、配布・回収を行った。438 名(男性 138 名, 女性 295 名, どちらでもない 5 名, $M=25.46$, $SD=2.769$)を分析の対象者とした。①年齢, 性別②評価過敏性-誇大性自己愛尺度(中山・中谷, 2006)③防衛機制:Defense Style Questionnaire(以下略 DSQ_{4,2}) (Andrew, Singh&Bond, 1993, 中西(1998)訳)④ ベック抑うつ尺度(BDI)日本語版(林, 1988)⑤日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(以下, BAQ) (安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・松井, 1999)対象者の抽出方法として、「評価過敏性-誇大性自己愛尺度」を使用し中山・中谷(2006)の類型化を基に分類を行った。その結果、評価過敏性が低く誇大性が高い「誇大型」が 111 名、誇大性が低く評価過敏性が高い「過敏型」が 95 名抽出された。この 206 名を t 検定と階層的重回帰分析の分析対象とした。

【結果と考察】 1 つ目の目的である相関分析では、評価過敏性と誇大性を比較すると成熟した防衛で異なった結果を示し、評価過敏性が負の相関を、成熟した防衛が正の相関を示した。評価過敏性の特性が強くなると、未熟な防衛や神経症的な防衛といった水準の低い防衛を多用しやすくなり、誇大性の特性が強くなると、成熟した防衛を多用することがわかった。このような結果を踏まえ、成熟した防衛の用い方によって、自己愛の特性の表出の仕方が変化すると考えられた。次に、2 つ目の目的である t 検定では、誇大型・過敏型には成熟した防衛や神経症的な防衛に大きな差はなく、誇大型で未熟な防衛が有意に高い結果であった。相関分析の結果から、成熟した防衛によって自己愛の特性の表出が異なると予測を立てたが、対象者を抽出すると誇大型の方が、低次の防衛を多用していることが明らかとなった。最後に、より 3 つの関連を詳しく検討するために、階層的重回帰分析を行った。結果として、抑うつおよび攻撃性の両方において、自己愛の方からの直接的な影響はなく、防衛機制からの影響が有意であった。つまり、自己愛の示す抑うつや攻撃性は、誇大型や過敏型といった自己愛のタイプ特有のものではなく、防衛スタイルの水準に左右されるものであることがわかった。